

10 後編 平成全史

令和の日本再生へ 今こそ知りたい平成全史

12 **Chronology** 編集部が取材・撮影した写真で振り返る平成（後半）と令和

14 **Part 1** 「平成」を利用したオウム真理教 カルトは今もあなたの隣に
江川紹子 ジャーナリスト

18 **Part 2** 阪神大震災で進化した警察「未災者」の国民にできること
西岡研介 ノンフィクションライター

22 **Part 3** 「相場観」を失った現代ニッポン「安上がり」に人を使うな！
鼎談 山田清機 ノンフィクション作家 × 小林美希 ジャーナリスト × 出井康博 ジャーナリスト

28 **Part 4** 増える不登校、変容するいじめ 対応策の「アップデート」を
石井光太 ノンフィクション作家

32 **Part 5** 誤解と誤算の迷走史 平成の大学改革から見えるもの
松本美奈 東京財団政策研究所 研究主幹

世界最先端を走る日本

36 **Interview 1** 「遺伝子にスイッチ」を入れよう
岡田武史 今治 夢スポーツ代表取締役会長、FC今治高等学校学園長

40 **Part 6** 引っ越しできない日本と中国 真の相互理解は進むのか？
対談 富坂 聡 拓殖大学海外事情研究所 教授 × 中村繁夫 UMCリソーシズCEO

46 **Part 7** 減る暴力団、増える半グレ 不都合な真実にも目を向けよ
溝口 敦 ノンフィクション作家、ジャーナリスト

50 **Column** 特集で振り返る ウェッジが報じた平成令和



MAGNUM OUTLINE



52 **Interview 2** 平成から令和で見た希望
「自分らしさ」で時代を拓こう

宇垣美里 フリーアナウンサー・俳優

聞き手・河合香織 ノンフィクション作家

56 **Part 8** 正念場を迎える福島復興
「巨大な実験場」で終わらせるな

開沼 博 東京大学大学院情報学環・学際情報学府 准教授

60 **Part 9** 消えない東電の責任
1Fの今が私たちに問いかけること

編集部

64 **Part 10** 平成を映すノンフィクション
私が選ぶとおきの3冊

稲泉 連 ノンフィクション作家

66 **Interview 3** ジブリがヒットを重ねる理由
`猛獣使い、鈴木敏夫の着眼点

鈴木敏夫 スタジオジブリ 代表取締役プロデューサー

聞き手・羽鳥好之 作家・金沢学院大学 特任教授

74 **Part 11** 平成でタガが外れた日本財政
根拠なき楽観論に物申す

矢野康治 前財務事務次官

78 **Part 12** 激変する時代にも変わらぬ信念 経営の`神髄、とは何か

対談 中島伸子 井村屋グループ 代表取締役会長 (CEO) ×

岩尾俊兵 慶應義塾大学商学部 准教授

83 **Column** 「人を大切に」経営の原点 井村屋・中島会長の壮絶な体験 編集部

84 **Part 13** 日本経済に吹く`追い風、を生かし
「扇の要」の技術を磨け！

滝田洋一 名古屋外国語大学 特任教授

88 **Part 14** 事件史で振り返る平成 「虚」から「実」への転換を

対談 與那覇 潤 評論家 × 石井妙子 ノンフィクション作家



- 95 各駅短歌 | 穂村 弘 未来
-
- 96 日本病にもがく中国 | 富坂 聡 製造大国から製造強国へ 中国はなぜ変わったのか？
-
- 99 誰かに話したくなる経営学 | 岩尾俊兵 分岐点はどこにある？「有能」な人が「有害」になる時
-
- 100 偉人の愛した一室 | 羽鳥好之 観阿弥「静岡浅間神社」（静岡県静岡市）
-
- 103 商いのレッスン | 笹井清範 「不正」にどう向き合うか
-
- 105 MANGAの道は世界に通ず | 保手濱彰人 かの名作を金字塔たらしめた その正体は「哲学」にあった！
-
- 107 拝啓オヤジ | 相米周二 やっぱ親子 オレとオヤジの必要とされる喜び
-
- 108 時代をひらく新刊ガイド | 稲泉 連 『現代アートを続けていたら、いつのまにかマタギの嫁になっていた』 大滝ジュンコ
-
- 109 一冊一会 | 編集部 「頭の体操」ができる一冊
-
- 110 フィクサー | 真山 仁 第三章 漏洩
-
- 118 モノ語り。 | 水代 優 塩辛い海水からつくる 百姓庵「海の塩」
-
- 122 読者から／ウェッジから



創刊35周年記念号

Wedge Special Report

平成 令和の日本再生へ 今こそ知りたい平成全史 全史

「平成全史」特集後編では、事件、災害、雇用、教育など、主に社会問題について考える。

「失われたX年」と、過去の栄光を取り戻そうとするのではなく、
令和の時代にどのようなビジョンを描き、実行していくのか？

それは、今を生きるわれわれ自身にかかっている。

江川紹子、西岡研介、山田清機、小林美希、出井康博、石井光太、松本美奈、岡田武史、富坂 聡、
中村繁夫、溝口 敦、宇垣美里、河合香織、開沼 博、稲泉 連、鈴木敏夫、羽鳥好之、矢野康治、中島伸子、
岩尾俊兵、滝田洋一、石井妙子、與那覇 潤、編集部

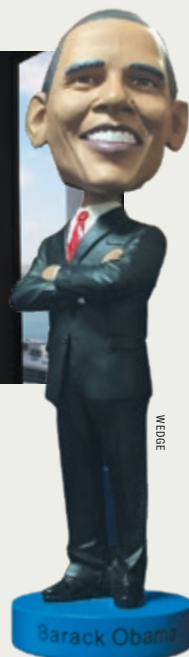
イラストレーション・マグマ ジャイアンツ

編集部が取材・撮影した 写真で振り返る平成(後半)と令和

スマートフォンが生まれた平成時代。小誌編集部が撮影した写真で2009年からの15年間を振り返る。

2009
1月に米国で黒人初の大統領に
バラク・オバマが就任

6月にはビッグ3の巨頭ゼネラルモーターズ(GM)が16兆4000億円もの負債を抱えて倒産。リーマン・ショックから厳しい経済状況が続いた。8月30日、衆議院選挙で民主党が勝利し、政権交代が起きた



デトロイトにあるGM本社ビル。写真を撮ったビルは、9.11で破壊されたニューヨークの世界貿易センタービルを設計したことで知られる日系人ミノル・ヤマサキ(1912~86)が設計したもの

2012
東京スカイツリーが
オープン 第二次安倍晋三政権発足



2014

2012

2010

2009

2011

2013

2015

2013

「特定秘密の保護に関する法律」が成立



震災1か月後の宮城県石巻市

2011

3月11日
東日本大震災が発生

東北沖で、マグニチュード9.0の巨大地震が発生し、三陸地方を中心に巨大大津波に襲われ、東京電力福島第一原子力発電所はメルトダウンを起こした

2010

アップルのiPadが
日本国内でも販売開始

5月28日、アップルのiPadが国内でも販売開始。写真は銀座のアップルストア前に並ぶ人々。iPhoneに続いて、iPadと、日本のエレキメーカーの存在感がどんどん薄れていった



小

誌が創刊した1989(平成元)年の約2年前、ある巨大組織が「崩壊」した。

日本国有鉄道(国鉄)のことである。

国鉄崩壊の要因はさまざまだが、一

つには、全国一体運営の公共企業体で

あり、運賃や賃金、設備投資などはす

べて、「国会の議決」が必要であった

点が挙げられる。経営の根幹は民意に

敏感な政治に握られていた。「当事者

意識」が芽生えるはずがない。

しかも、政治は我田引水ならぬ「我

田引鉄」とばかりに、不採算が明確な

地方でも鉄路整備を掲げた。借金で経

営状況が悪化してもなお、国会の議決

を得るため、やるべきことが明確であ

っても、職員の要員合理化や赤字路線

の廃止、運賃値上げなど、経営に直結

する課題は「先送り」され続けた。

一方、現場では、一部を除き多くの

職員が日々、職務遂行に奮闘していた。

だが、公共企業体という経営形態もあ

り、「国鉄は倒産しない」「最後は国が

何とかしてくれる」という意識が強く、

まさに「ゆでガエル」状態のまま、衰

退し、崩壊していった。

こうした歴史を見るにつけ、私には、

現代日本のさまざまな諸問題が、国鉄





2020

新型コロナウイルスがまん延 (パンデミック)



1月に、中国からの帰国者の新型コロナウイルス感染が国内で初めて判明。その後、初の緊急事態宣言が発出。写真は緊急事態宣言下、4月16日15時38分の新宿駅南口。人がほとんどいなかった。9月には、安倍政権総辞職。第二次安倍政権発足以降、連続在任日数は2822日で憲政史上最長

2019

皇太子徳仁親王が第126代天皇に即位 時代は、平成から令和に

「泡沫候補と見られていたトランプ氏が大統領に当選した。米国で取材すると、トランプ氏はラストベルトの小さな街まで訪問し「こんなところまで来てくれた」と、住民が感謝しているのが印象的だった



2017

ドナルド・トランプが 米第45代大統領に就任



2014 消費税が5%から8%へ

9月8日、日本でテスラ車の納車が開始された。写っているのは「モデルS」。当時、デザイン性の高さに驚かされた。今や、モデル3、Y、Xなど、日本でも普通に見かける電気自動車になった

2024

2023

2022

2020

2018

2016

2021

2019

2017

2024

2023

2022

2021

2018

2015



4月20日 Wedge
35周年記念号
(前半) 発売

ジャニーズ事務所が性加害を認め謝罪

安倍元首相が銃撃され
搬送先の病院で死亡

東京五輪無観客で開催

日産のカルロス・ゴーン会長逮捕



2016 熊本地震発生

震度7を記録。3000人以上の死傷者を出した。写真は「阿蘇大橋」(24年3月に撮影)

「安全保障関連法」が成立
集団的自衛権の行使が可能に



崩壊前夜の構図と酷似しているように思えてならない。やるべきことが明確であっても、問題が先送りされ続けるのはその最たる例だろう。国鉄もバブルもそうだが、問題の本質は、そうした不都合な現実から目をそらし、その「崩壊」に備えることができなかった点にあるのではないか。日本を国鉄の二の舞いにしてはならない。

日本の再生は日本人の手で
平成の歴史から学ぶこと

昨今、激甚化する自然災害や経済の停滞などを前にして、日本の将来に対し、悲観論が根強い。だが、あきらめるのは早計だ。打開策は必ずある。

今、日本人に必要なことは、問題を正視し、それに至った原因、すなわち、平成の時代に起きたさまざまな「変化」や「出来事」をしっかりと検証すること、起こり得る将来に備えること、新しい時代の未来を描き出し、勇気を持って、一歩前に踏み出すことではないか。令和の日本の再生は日本人の手に委ねられている。大切な日本を守り、発展させることができるかどうか。国民一人ひとりの決意と行動が今、問われている。(編集長・大城慶吉)

「平成」を利用したオウム真理教 カルトは今もあなたの隣に

オウム事件は平成だから起こったのではなく、時代状況を利用したものだと筆者は言う。
今もなお、われわれの近くに存在する危険に、どのように対応すればよいのだろうか。



GAMMA RAPHOTO

オウム真理教では、人のあらゆる欲求や感性を「煩悩」と呼び、滅却すべきものとされた

こうした経緯から、多くの人の記憶の中でオウム真理教は「平成」という時代と結びついているのではないだろうか。

オウム真理教が最初の殺人事件を犯したのが1989(平成元)年2月。教団の秘密を知っている信者が脱会するのを阻止するためだった。同年11月に、教団と対峙していた坂本堤弁護士とその妻を殺害。94年の松本サリン事件、95年の地下鉄サリン事件を経て、ようやく警察が一斉に強制捜査を展開し、教祖以下の幹部は逮捕された。その後は教団の犯罪を裁く司法のプロセスが長く続いた。逃走犯も含め、全ての被告人の裁判が終わったのは、2018年1月である。そして7月、死刑が確定していた13人の刑が、2回に分けて、全国6つの拘置所で執行された。

オ



文・江川紹子
Shoko Egawa
ジャーナリスト

1958年、東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部を卒業後、神奈川新聞社会部記者を経て、フリージャーナリスト。神奈川大学特任教授。95年にはオウム真理教の取材で第43回菊池寛賞受賞。著書に『カルト』はすぐ隣に(岩波書店)など多数。



阪神大震災で進化した警察 「未災者」の国民にできること

「平成」という時代を通じ、災害を経るたびに支援体制を進化させてきた警察。
だが、能登半島地震で新たな課題に直面した。今、国民に求められていることは。



文・西岡研介
Kensuke Nishioka

ノンフィクションライター

1967年、大阪市生まれ。『神戸新聞』社会部記者として、阪神・淡路大震災などを取材。『週刊文春』記者などを経て、フリーランスに。著書に『ふたつの震災——[1.17]の神戸から[3.11]の東北へ』（松本創との共著、講談社）など多数。

今

も忘れられない光景がある。平成が「災害の時代」と呼ばれる原点となった「阪

神・淡路大震災」（以下、阪神大震災）の発生から3日後、1995年1月20日のことだ。

阪神大震災で、家屋倒壊による被害が最も大きく、神戸市内で最多の1469人の死者を出した東灘区では、発災から、生存率が大幅に低下するといわれる72時間が過ぎてもまだ、多くの人たちが建物の下敷きになっていた。その日の午前、同区本山中町でも、一家4人が生き埋めになったままだった。

現場では、応援に駆けつけた福岡県警管区機動隊の隊員たちが、懸命の救出活動を続けていた。

隊員220人は17日の発災後、被災地を中心に東西に広がった大渋滞を乗

り越え、翌18日に神戸に入り、東灘区で救助活動を始めた。当時、重機を持っていなかった同隊の活動は、木造家屋に限られたが、出発前に、スコップやつるはしをかき集め、車両17台に積めるだけ積んできた。18日は1人、19日は3人の生存者を救出し、両日で51体の遺体を収容した。現場には、遺体を覆う布すらなく、隊員は自分たちの毛布を遺体にかけた。

掘り起こし作業が始まってから数時間後、家族を守ろうと、倒れてきた梁を支えるように息絶えていた父親が発見された。続いて母親。さらに、壁土の下から幼い兄弟が見つかった。6歳

の弟が、9歳の兄の腕にしがみつくように息を引き取っていた。

4人の遺体を運び出した後、1人の若い隊員が、遺体に寄り添うように膝をつき、首に巻いていたタオルで、兄弟の顔についた泥を落とし始めた。「きつかった（つらかった）ね、きつかったね……」。その声をかけつつ隊員は、子どもたちの顔を拭き続けていた。

彼らの救出活動に、一縷の望みを託していた私も、構えていたカメラを下ろさざるを得なかった。

震災発生当時、私は、地元紙『神戸新聞』の警察担当記者、いわゆる「サツ回り」で、神戸市内の所轄警察署を



3号神戸線は物流機能の生命線であり、その倒壊は大きな衝撃を与えた

世界最先端を走る日本 「遺伝子にスイッチ」を入れよう

1998年、サッカーワールドカップに初出場を果たした日本代表。チームを指揮したのが岡田武史だ。指導者、経営者に加えて、教育者としての顔も持つ岡田が見た「平成」とは——。

聞き手／構成・編集部（野川隆輝、鈴木賢太郎） 写真・さとうわたる



1

岡田武史

Takeshi Okada

今治、夢スポーツ代表取締役会長
FC今治高等学校学園長

1956年、大阪府生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、古河電気工業サッカー部（現・ジェフユナイテッド千葉）に入団。ディフェンダーとして日本代表でも活躍。90年に引退後、ドイツへのコーチ留学を経てコンサドーレ札幌、横浜F・マリノス、日本代表などの監督を歴任。2010年のFIFAワールドカップ南アフリカ大会ではチームをベスト16に導く。

997年11月16日、マレーシアのジョホールバルで行われたFIFAワールドカップ（W杯）アジア最終予選。2対2のまま延長戦にもつれこんだイラン代表との激闘は、PK戦に突入する目だった。

残り時間が2分に迫った延長後半13分、中田英寿の左足から放たれたシュートは相手ゴールキーパーに防がれるも、弾いたところに岡野雅行が詰めてゴールネットを揺らした。日本代表のW杯初出場が決まった瞬間である。

「ジョホールバルの歓喜」として日本のサッカー史に刻まれているこの試合は、「平成」を通じてW杯の出場常連国に上りつめた日本の原点ともいえる。この時、チームを率いていたのが



Part 7 SOCIAL

減る暴力団、増える半グレ 不都合な真実にも目を向けよ

半グレが隆盛する一方、暴排条項などで暴力団が激減している。
国民は安堵しているかもしれないが、さまざまな問題が噴出している。



文・溝口 敦
Atsushi Mizoguchi
ノンフィクション作家、
ジャーナリスト

1942年東京都生まれ。暴力団
や新宗教に焦点をあてて執筆
活動を続け、『食肉の帝王』（講
談社）で第25回講談社ノンフ
ィクション賞などを受賞。



（前編）「衰退する夜の銀座 裏面にある女性たちの『性』の自己管理」はWEB版でご覧いただけます

今

から約60年前、1963年の暴力団構成員数は戦後ピークの18万4000人を数

えた。それが2023年は2万400人、最盛期の1割近くまで減少した。一説によると日本のタレント数が2万5000人超というから、タレントよりヤクザの数が少ない。警察庁では暴力団を「反社会的勢力（反社）」としているが、産業的に見ればすでにオワコンに近い。特に平成はそれらの動きを加速させた時代だと振り返ることができる。

彼らが手掛ける犯罪のうち今もシェア1位を占めるのは覚醒剤の密輸、密売ぐらいだ。全国の流通をほぼ独占的に牛耳り、覚醒剤は彼らが所属する組という垣根を越えて横断的に流通している。大麻や危険ドラッグ、特殊詐欺などになると、もっぱら匿名型流動性犯罪集団（半グレ）や不良外国人が中心である。

警察庁は暴力団の伝統的資金源（シノギ）を覚醒剤、恐喝、賭博としている。このうち恐喝は年々減少している。相手が、自分を何組の誰と分かった上で強行するのが恐喝だが、今は被害者

に自分がどこの誰だか分からせない、つまり名前や身分を偽り、隠れることでカネをだまし取る詐欺の方が犯罪の主力であり、被害額も大きい。

ヤクザは「男を売る」商売といわれるように、周りに自分がどこの誰と分からせた上でシノギを進める。逆にオレオレ詐欺などは徹底的に被害者をだまし、自分が被害者の孫だとさえ偽る。恐喝と詐欺は両方とも相手からカネを奪う犯罪だが、その働きかけ方は脅すか、だますか、正反対のアプローチをとる。現在、詐欺に手を染める組員は多いが、本来は恐喝こそ暴力団の得手であり、特殊詐欺などにはヤクザがむしろ半グレの後に進出している。一般的にヤクザは若手が少なく、新しいシノギの創建や熟達は不得手である。

シノギのうち、賭博は競馬や競輪などの公営賭博に押され、かつ常設盆（注：常設賭場）や野球賭博は警察による徹底的な取締りで壊滅状態といっている。他に飲食店や遊技場などから「みかじめ料（注：後見役代、用心棒代）」があるが、これも近年、警察の指導や11年までに施行された暴力団排除条例（暴排条例）で店が打ち切りにするか、大幅に減額した上、渋々支

払う程度に削がれている。

暴力団は親子盃を特徴としている。擬制血縁関係といい、赤の他人が盃により親—子の関係を結ぶ。ある親の子は全て兄弟分となり、新旧で兄貴分や舎弟に区分される。親分の兄弟分は子分にとっては叔父貴になる。そのメンバー（組員）はそれぞれが自営業者といつてよく、親分や兄貴分に教えられ、それぞれのシノギを始める。兄貴分にシノギを手伝ってもらったりすることはあるが、組全体が丸となって特定のシノギに総当たりすることはほぼない。ただ覚醒剤専門の組は別で、組員のおおかたが密売に従事する。

子分はシノギを覚え、親も手に余す不良の自分がこうして食えるようになったのは親分や代紋（いわば組のバッジ）のおかげというわけで、親分（組）に月の会費（定額）を差し出す（他に臨時出金もある。2つを併せて警察は上納金と呼ぶ）。

暴排条例がもたらす影響 組員のアングラ化とは

バブル盛期、地上げを手掛けるヤクザの中には億というカネを握った者がざらにいた。中堅層以上では株でも儲

けた。だが、バブルが弾けると、ほぼ全滅状態になり、11年までに全都道府県で暴排条例が施行されると、ますます窮乏化した。

同条例は暴力団と一般社会の分断を主目的に据え、例えば暴力団への「利益供与の禁止」を規定した。みかじめ料の支払いなどもつてのほかで、一時は飲食店の出前や宅配便の発送、配達も禁止という騒ぎになった。また条例と共に、全国銀行協会などの業界ごとに「暴排条項」も定められた。これにより組員は新規に銀行口座を開設できない、組をやめて5年以内の者は組員と同じように扱うなどの規則を盛り込まれた。

組員が組をやめて普通の会社に就職しようにも、給与振り込みの口座さえ作れないので就職できない、スマートフォンや車が欲しくても月払いの購入を拒否される、ETCカードを持つことができず、高速道路の利用も不便を強いられ、アパートを賃借することもできない、ゴルフ場の利用時に「組員である」にチェックを入れなかったのて事後、詐欺で逮捕されるなど、組員の人権を否定するようなトラブルが各地で相次いだ。



「日本政府には資産がたくさんあるから大丈夫?」。こうした楽観論が跋扈しているが……

Part 11

FINANCE

平成でタガが外れた日本財政 根拠なき楽観論に物申す

財政規律が弛緩し、借金が急激かつ雪だるま式に膨らんでいった平成の日本。
財政楽観論や減税論に惑わされず、構造的な改革を断行していくべきだ。

さらに、平成は、リーマン・ショックや東日本大震災など、大きな危機が起ころうたびに、財政依存を深めてきた。これは、令和になっても踏襲され、コロナ禍での10万円の特別定額給付金をはじめ、年間の国家予算に匹敵する100兆円以上に上る巨額の財政出動を行った。

「開いた口が塞がらない」という構造赤字が続いている。その穴埋めは公債の発行で賄われてきた。

本
の
借
金
が
急
激
か
つ
雪
だ
る
ま
式
に
膨
ら
ん
だ
の
は
、
平
成
の
時
代
が
始
ま
っ
て
か
ら
で
あ
る。
高
齢
化
に
よ
る
社
会
保
障
費
な
ど
の
歳
出
が
増
え
続
け
る
一
方
、
税
収
は
バ
ブル
が
崩
壊
し
た
1990年
度
を
境
に
伸
び
悩
み
、
そ
の
差
は
い
わ
ゆる
「ワニの口」の
よ
う
に
開
い
た。
し
か
も
、
少
子
化
に
よ
り
税
の
担
い
手
が
減
り
続
け
て
い
る
か
ら
、
ま
さ
し
く
、「開いた口が塞がらない」と
い
う
構
造
赤
字
が
続
い
て
い
る。
そ
の
穴
埋
め
は
公
債
の
発
行
で
賄
わ
れ
て
き
た。



文・矢野康治

Kouji Yano

前財務事務次官

1985年一橋大学経済学部卒業、大蔵省（現財務省）入省。大臣官房審議官（主税局担当）、大臣官房長、主税局長、主計局長などを経て、2021年7月から1年間、財務事務次官を務めた。

事

件は世相を映す鏡と
言っても過言ではな
い。経済の低迷やイ
ンターネットが誕生

した「平成」という時代の中で起こった数々の事件。昭和の時代とは一体何が違うのか。ノンフィクション作家の石井妙子氏と『平成史』（文藝春秋）を著した與那覇潤氏が語る。

編集部（以下、――）昭和の時代に比べて、平成の事件の特徴とは何だとお考えですか。

石井 あくまでも個人的な見方ですが、昭和の時代の犯罪というものは、その動機に、大きな理由というものがあったように思います。腑に落ちる見えやすさというのでしょうか。

與那覇 おっしゃるとおり、国民が共有する価値観を失った平成の事件は、凶行に至った犯人のロジックをたどりにくい点が特徴だと思っています。例えば、右翼少年が起こした「浅沼稻次郎社会党委員長刺殺事件」（1960年）や連合赤軍の「あさま山荘事件」（72年）は、その政治的な動機が明瞭でした。

石井 平成に入り、2008年に起きた「秋葉原通り魔事件」では、事件発

Part 14 EMPTINESS

事件史で振り返る平成「虚」から「実」への転換を

平成時代は、動機がわからない「薄気味悪い」事件が多々起こったように思われる。ネット世界、承認欲求、自殺願望……。平成時代のキーワードとひもづけながら、その背景に迫る。

聞き手／構成・編集部（野口千里） 写真・中村 治



生後、さまざまな識者が「格差社会で生まれた犯罪だ」「派遣労働者の怒りが根底にある」といった解釈で事件を捉えていました。私もその解説で腑に落ちていたのですが、加藤智大元死刑囚が書いた4冊の著書を読むと、全く違う理由であることが分かりました。彼はむしろ、正社員よりも自由に辞められる派遣社員として働くことが好きだったのです。事件を起こした理由も携帯電話サイトの掲示板で知らない人とながり、トラブルになったことが原因でした。

與那覇 秋葉原事件の前には「西鉄バスジャック事件」（00年）がありました。犯人の少年は「2ちゃんねる」のヘビーユーザーで、「強がっているけど、口だけだろう？」といった書き込みで煽られていたとされます。彼も加藤元死刑囚も、一度は期待したオンラインのつながりに「裏切られた」と感じて、リアルな暴力に走った面があります。

石井 ネット上で知らない人から自尊心を傷つけられ、「どうせ、できるわけない」と焚きつけられた結果、「だったらやってやる」という形で犯行に及んでいる点で、西鉄事件も秋葉原事件も構図が似ています。ただ、その犯

行動機は理解に苦しみます。私がネットに疎いこともあるかもしれませんが、あくまでも相手はネット上の人物で、会ったことも見たこともない人。そういう人たちへのアピールのために無差別殺人を行うなんて。彼らの中では、ネット社会のほうが大きくて、現実社会のほうが小さくなってしまっているのでしょうか。

與那覇 ネットでの「自分の評判」こそが一番切実というのは、そもそもネット自体が存在しなかった昭和にはあり得なかった感覚ですよね。

たとえば秋葉原事件を皮切りに、突如発生した重大犯罪を「テロ」と呼ぶか否かが論争を呼ぶことがあります。令和の「安倍晋三元首相銃撃事件」（22年）もそうでした。私はむしろ、平成以降はどんな事件でも何かしらのテロ性を持っているのではと感じています。「自分の評判がここまで低いのは、今の世の中そのものが狂っている。だから全否定してやる」といった、世界の滅亡を描く「セカイ系」のアニメのような情動で起こすテロですね。ネット上の世界こそが、現実の社会よりも生々しい実感を伴って感じられています。